

平成22年5月18日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19720020

研究課題名（和文） ユダヤ思想史における民族と国家：

バイナショナリズム運動の挫折をめぐって

研究課題名（英文） Nation and State in the History of Jewish Thought:

Around the Collapse of Binational Movement

研究代表者

早尾 貴紀 (HAYAO TAKANORI)

大阪経済法科大学・アジア太平洋研究センター・客員研究員

研究者番号：20449846

研究成果の概要（和文）：

本科研費による研究活動開始前からの刊行論文も併せて、2008年に単著『ユダヤとイスラエルのあいだ——民族／国民のアポリア』（青土社）を出版した。マルチン・ブーバーおよびハンナ・アーレントという二人のドイツ系ユダヤ人哲学者の模索したバイナショナリズム、つまりパレスチナにおけるユダヤ人とアラブ人の共存思想の展開と隘路を辿った（同書前半）。また、建国後のイスラエルに対して、アイザイア・バーリンやジュディス・バトラー、マイケル・ウォルツァーらリベラル派のユダヤ人によるイスラエル批判の意義と限界を分析した（同書後半）。

そのかん、イスラエル／パレスチナへの研究滞在（主としてヘブライ大学とハイファ大学）および現地からの研究者の招聘（ハイファ大学カイス・フィロ教授）などを重ね、資料調査・研究交流をおこない、上記単著以降の研究の展開を模索した。

その成果として、ブーバーやアーレントの同志であった重要人物ユダ・マグネス初代ヘブライ大学学長をはじめとする、建国直前期のヘブライ大学の哲学者たちが、いかに排他的な民族主義に陥ることなく、アラブ人・アラブ文化と共存しながら自らのアイデンティティを保持するののかという課題に取り組んでいたことの意義を分析する論考を発表した。

その他、「ディアスポラ」から民族の越境と共存を読み直す共同のプロジェクトに参加し、そのなかでのバイナショナリズムの歴史的意義と現代的可能性を考察する論考を発表した。

研究成果の概要（英文）：

In the publication of my book, *Between Jewish and Israel: the Aporia of Nation* (Seidosha, 2008), I discussed the binational thought by two German-Jewish philosophers, Martin Buber and Hannah Arendt, who sought after the coexistence of Jews and Arabs in Palestine. Besides, I treated several liberal Jewish thinkers like Isaiah Berlin, Judith Butler, Michael Waltzer, who somehow criticized the military occupation by Israel government but supported the idea of Zionism or the Jewish State.

Meanwhile, I visited Israel and Palestine (mainly Haifa Univ., Hebrew Univ., Alternative Information Center), collecting documentary materials, as well as invited a very important professor, Kais Firro (Haifa Univ.) for workshops. Then I proceeded my research on the same theme.

As the result, I published an article about the thoughts and activities of Judah Magnes, the first president of Hebrew Univ. and his colleagues who insisted on the coexistence with Arab people at the same time keeping their own Jewish identity before the foundation of Israel as a Jewish State.

Besides, I participated in a collaborative project which was trying to examine the crossing-borders by nations and the coexistence from the viewpoint of “diaspora”, where I wrote another article to seek both the historical significance and the contemporary possibility of binationalism.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	0	1,300,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	630,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：社会思想史

1. 研究開始当初の背景

排他的な民族主義、国民国家をいかに批判的に乗り越えることができるのか。ユダヤ人国家としてイスラエル建国以前に、アラブ人とユダヤ人が共存することのできる政治枠組みや文化アイデンティティを模索した思想運動があった。結局このバイナショナリズム運動は、イスラエル国家がユダヤ人国家として建国されるとともに敗北することとなったが、思想的遺産としては学ぶべきところが多い。

だが、そうした思想は、非現実的な理想主義として打ち捨てられ、研究史的にも顧みられることがなくなっていた。民族紛争に対する対案、他民族との共存という、古いがなお切実な課題に応えるための重大なヒントがここにあると考えた。

2. 研究の目的

これまで研究対象としてきたバイナショナリズム思想家のマルティン・ブーバーおよびハンナ・アーレントからさらに対象を広げて、当時二人と共闘関係にあった初代ヘブライ大学長ユダ・マグネスおよびその同僚たち、および二人の思想的後継者たちの、アラブ人との共存の取り組み、および国家主義に陥らないユダヤ文化のアイデンティティの模索の実態を解明する。また、歴史的にはユダヤ人国家の前に敗北したその思想運動が、いったいどこでどのように挫折したのかをも解明し、積極的意味だけでなく、負の遺産としても学ぶべき点を確認する。

さらに、それらがパレスチナ問題をはじめとして、さまざまな現代の民族紛争に対してもつ教訓を探究し、現代世界における「民族と国家」の理論化に向けた端緒を探る。

3. 研究の方法

イスラエル・ヘブライ大学図書館、イスラエル国立図書館などに出向き、当時のバイナショナリズム運動などの歴史資料を収集・調査する。また流通している書籍や雑誌における研究動向を広範に把握し、民族や国家をめぐる哲学的考察に目を通しながら、パレスチナにおけるバイナショナリズムを再論する意義を文脈づける。

同時に、ユダヤ人とアラブ人の「共存」に関するまた、アラブ人との共存に取り組んでいる研究者やNGOなどを訪れ、研究交流を深め、バイナショナリズム運動に対する評価やアクチュアリティを探る。必要に応じて、イスラエルから研究者を招聘することで、関連分野の日本の研究者との研究会をもち、情報交換や討議を深め、自らの研究テーマに資するようにする。

4. 研究成果

(1) マルティン・ブーバー、ハンナ・アーレント以降の研究展開として、同時代のヘブライ大学の哲学者たちの取り組みを検討し、論文「ユダヤ人国家」の普遍性を追求したヘブライ大学の哲学者たち」としてまとめた。排他的民族主義によってヨーロッパを脱したユダヤ人哲学者たちは、排他主義を批判し

(つまりこの場合はアラブ人との共存を肯定し) 普遍主義を求めた一方で、形式的普遍主義が民族的アイデンティティの喪失へと陥ることを恐れ、ユダヤ文化のアイデンティティを保持しようとした。この普遍と特殊のアポリアの止揚こそが、当時のヘブライ大学のとくに哲学科に賭けられた課題であった。

ヨーロッパ哲学史の現代ヘブライ語への翻訳やカリキュラム編成を通して近代化の模倣を進めつつ、しかし民族的純粋性に依拠せず、アラブ人との共存前提とした新しい国民国家をいかに構築することができるのか。1948年のイスラエル建国前から建国直後まで初代の学長を務めたユダ・マグネスをはじめ、哲学科長、図書館長らの思想と行動から、その可能性の萌芽を探った。

(2) 単著『ユダヤとイスラエルのあいだ』の後半部分で、ユダヤ人国家としてイスラエルが建国されて以降の思想的課題として、アイザイア・バーリン、ジュディス・バトラー、マイケル・ウォルツァーといった、いわばリベラルなユダヤ人思想家らのイスラエル国家に対する評価を検討した。

彼らは、自らイスラエルに移住することをせず、国家に同一化することを避け、またイスラエルによるパレスチナ占領についても一定批判していた。しかしながら、イスラエル国家のユダヤ性そのものを、すなわち「ユダヤ人国家」という理念を、あるいは少なくともアラブ人に対するユダヤ人の優越性を否定することはできなかった。ユダヤ・リベリズムは、相対的寛容の次元では積極的意義と批判力を発揮しながらも、原理的な部分で真に排他主義や自民族中心主義を超克するには至らなかった。問題の核心とその解決がリベリズムにあるのではないことが示された。

それに対して、さらに考える二つの批判的思考を検討した。一つがラビ・ユダヤ教の伝統がもつ、ユダヤ教と国家を結びつけることをタブーとした反国家思想の現代的意義だ。ユダヤ・アイデンティティを保持しながらも、ユダヤの名で国家をもつことを神への冒瀆として禁止し、異教徒統治のもとで共存することを是とした。もう一つは、エドワード・サイードらパレスチナ人の側からのバイナショナリズムの再評価である。かつてユダヤ人の側から提示されたこの思想的遺産が、21世紀に入って別の意味づけをなされ再生しつつある。この二つの方向から、民族と国家を再考する新しい視点を提示した。

(3) ディアスポラ(離散)のユダヤ人の一部が展開したディアスポラ思想の展開を、論文「ディアスポラと本来性——近代的時空間の編制と国民/非国民」で検討しつつ、他地

域・異分野の若手研究者らとともに、ディアスポラ思想がもつ民族問題への貢献について討議をもち、論集『ディアスポラから世界を読む——離散を架橋するために』としてまとめた。ユダヤ思想に起源をもちながら、近年人文社会学分野で広く使われるようになってきた「ディアスポラ」概念を、最大公約数のところで他分野の研究と共有しながら、いかにディアスポラから世界史および現代世界の読み直しを行なうことができるのか、またいかなるアクチュアルな意義が読み取れるのかを、それぞれの立場から提起し討議をもった。同書はさらにその議論を踏まえたうえで書かれた成果である。

私自身はそのなかで、「ディアスポラと本来性——近代的時空間の編制と国民/非国民」という論考を執筆し、「国民」の誕生・発展とともに、その背後で「非国民」、「難民」、「無国籍者」といった事象が、ヨーロッパ、パレスチナ、日本でどのように発生したのかを検討しつつ、排他的国民主義を超克する思想として、ディアスポラ概念を提示した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

- ① 早尾貴紀、「偽日本人」と「偽ユダヤ人」——「国民」の「本来性」をめぐる、『現代思想』、青土社、2007年6月号、第35巻7号、196-210
- ② 早尾貴紀、パレスチナ/イスラエルの「壁」は何を分断しているのか——民族と国家の形を示す四つのドキュメンタリー映像、『現代思想』、青土社、2007年10月臨時増刊号、第35巻13号、242-255
- ③ 早尾貴紀、東北地方・秋田で読むヘーゲル以降の二世紀の哲学——「故郷喪失」と「本来的国民」について、『ことばと文学・ことばとパワー——秋田大学国際シンポジウム論文集』、秋田大学、2008、37-43
- ④ 早尾貴紀、「ユダヤ人国家」の普遍性を追求したヘブライ大学の哲学者たち、西山雄二(編)『哲学と大学』(西山雄二編)、未来社、2009、165-186
- ⑤ 早尾貴紀、ディアスポラと本来性——近代的時空間の編制と国民/非国民、『ディアスポラから世界を読む』(臼杵陽監修)、明石書店、2009、166-206
- ⑥ 早尾貴紀、国籍と戸籍を考える、『移民政策へのアプローチ——ライフサイクルと多文化共生』(川村千鶴子他編)、明石書店、2009、52-55
- ⑦ 早尾貴紀、ガザ地区とパレスチナ占領の概要およびサラ・ロイの仕事、『ホロコース

トからガザへ』(サラ・ロイ著)、青土社、2009、11-40

⑧ 早尾貴紀、シオニズムにとっての土地と占領、『〈鏡〉としてのパレスチナ』(ミーダール編)、現代企画室、2010、60-82

〔学会発表〕(計2件)

①日本法社会学会 シンポジウム「民族問題と法社会学」(個別報告は、早尾貴紀「パレスチナの分断とコリアンの分断」、明治大学、2009年5月9日

②日本ユダヤ学会 研究例会発表「「灰」のなかからユダヤ人のディアスポラとアイデンティティを再考する」、早稲田大学、2009年7月19日

〔図書〕(計2件)

① 早尾貴紀、青土社、ユダヤとイスラエルのあいだ——民族／国民のアポリア、2008、345

② 臼杵陽[監修]、赤尾光春、早尾貴紀[編]、明石書店、ディアスポラから世界を読む——離散を架橋するために、2009、464

6. 研究組織

(1) 研究代表者

早尾 貴紀 (HAYAO TAKANORI)

大阪経済法科大学・アジア太平洋研究センター・客員研究員

研究者番号：20449846

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし